

「夜の風景」が 研究のフィールド

個性ある街の灯りを創造する環境系研究室



建築学科

小林茂雄 教授

SHIGEO KOBAYASHI

東京工業大学工学部建築学科卒業。同大学院修了。工学博士。武蔵工業大学（現：東京都市大学）工学部建築学科講師、准教授、ネヴァダ州立大学ラスヴェガス校客員研究員などを経て2011年より現職。日本建築学会賞（論文）受賞など。



照明と色彩が描き出す 建築物の新しい表情

個人住宅から高層ビルまで、一言で「建築物」といってもその用途や規模、構造は様々。共通するのは、短くても数十年、ときには50年、100年という寿命（耐用年数）の長さだろう。住宅ならまだしも、オフィスビルや公共施設では挑戦的な試みや奇抜なアイデアより、保守的で飽きのこない設計・デザインが主流になるのは当然。「だからこそ、照明や色彩など「後付け」の要素で建物に新しい表情を持たせたいんです」。そう唱えるのは、建築物や街路といった、周辺環境が人々の心理にどんな影響をもたらすのかを考える「環境心理学」を研究する小林茂雄先生。その好例が小林先生自身の研究室にあった。

何の変哲もない研究室の照明はライトコントロール付きで、明るさだけでなく、

色合いも自在に調節できる。「例えば学生と腹を割った話をする時は暖色系の照明で、少し明るさも落とします。逆に、緊張感がほしい時は明るめの寒色系。器は同じでも、光や色の環境が人に与える影響はとても大きいんです」と小林先生。その取り組みはもちろん、室内空間だけにとどまらない。

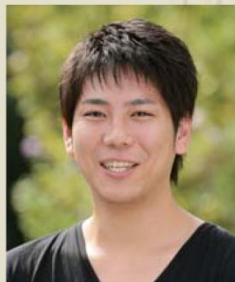
目標は街の魅力が 浮かび上がる街路設計

小林先生が今、最も力を注いでいるのは街路照明の設計。商店街や住宅地などの夜の風景をもっと安全で魅力あるものにしたいそうだ。「できるだけ明るく、というのが街路照明の固定概念。でも、明るい照明はその分、深い影をつくります。特に住宅地などでは街路灯をむやみに明るくせず、住宅の玄関灯や窓の灯りと同じ程度に抑えた方がいい。そうすれば、

家々から“人の気配”を感じますよね。その方が街の連帯感や安全性が高まると思うんです」。現在、近隣の商店街から要請を受け、街路灯の改修計画なども策定している小林研究室。その根底にあるのは、住民が主体となって取り組む「魅力ある地域づくり」である。

夜間照明といえばイルミネーションやライトアップを思い浮かべるが、小林先生の発想はそうしたイベント的な仕掛けとは一線を画す。「大切なのは住民の意識と参画。道行く人のためにこだわりのある小さな灯籠を軒先につり下げたり、部屋の灯りを外に漏らすデザインを計画したり、そこに住む人々ができることで夜の風景をつくり出す、そのお手伝いをしたいんです」。何もかもを包み隠す夜だからこそ可能な光の演出。それは確かに、容易には変わらない建築物に新しい表情を与える、ユニークなチャレンジといえそうだ。

Student Voice



矢澤 歩さん

大学院工学研究科建築学専攻
修士2年

武蔵工業大学付属高校出身
（現・東京都市大学付属高校）

実際に商店街の街路計画を策定中！ やりたいことができる大学と研究室

もともとは建築や設計への漠然とした興味から建築学科を選んだのですが、2年生の時に小林先生が主宰したキャンパス・イルミネーションを見て照明に興味を持ち、この研究室を選びました。大学院への進学を考えたのは研究室に入ってから。院生の先輩をお手伝いしているうちに、自分が主体となって研究に取り組みたいと思うようになったんです。

現在の研究テーマは商店街の街路灯計画。実際の商店街を対象に、それぞれのお店の個性を引き出せるような街路計画を提案していく予定です。机上のプランだけで終わらず、いずれは自分たちが考えた街路灯が実現するかもしれない。そんなアウトプットの場を用意してもらっているのも小林研究室の魅力ですね。

東京都市大学の建築学科は課題が充実し過ぎて大変といわれますが、その分、確実に設計力が身につきます。入学後の選択肢もすごく幅広いですし、自分のやりたいことが必ず見つかる場だと思います。